

氏名

麦 雅代

REM 睡眠行動障害 (RBD) は、REM 睡眠中に起こる睡眠随伴症のひとつである。REM 睡眠中に、筋緊張の抑制が欠如し夢行動に一致した行動が出現する。神経変性疾患の早期症状として報告されており、長期観察において神経変性疾患への罹患が多く、40~65%にもものぼるといわれている。今回の研究では、神経変性疾患と関連が深い RBD 患者において、嗅覚障害の頻度と傾向の検討を行ったので報告する。

愛知医科大学病院睡眠科にて RBD と診断された患者で、研究に同意を得られた 49 例を対象とした。認知機能は MMSE を用い、耳鼻科診察、鼻腔通気度検査、基準嗅力検査を施行した。基準嗅力検査は 5 種のニオイ溶液で構成され、どのようなにおいかわかった濃度 (認知域値) の平均値より、5 段階に嗅覚障害を分類する。又、嗅覚障害の程度と MMSE 値の関係を回帰分析にて検討した。

MMSE 検査は、43 例で施行した。24 点以下は 5 例であった。鼻診察では、9 例で異常を認めた。鼻腔通気度検査では、11 例で鼻閉を認めた。基準嗅力検査では、32 例 (65.3%) で嗅覚障害を認めた。MMSE 施行例で呼吸性または嗅粘膜性嗅覚障害を除いた 40 例において、基準嗅力検査の平均認知域値と MMSE 値の関係について表示した。MMSE 値が低下すると平均認知域値が上昇するという相関関係は認めなかった。
($P=0.501372$)

嗅覚も他の感覚器と同様に加齢とともに機能低下をきたすと言われており、65 歳以上では嗅覚障害の有病率は 13.9%であると報告がある。神経変性疾患では、初期から加齢による低下を超えた嗅覚障害が認められると多数の報告がある。

本研究では RBD 患者を対象に本邦で保険適応のある、基準嗅力検査を用いて、嗅覚障害の検討を行った。RBD 患者 49 例中、32 例 (65.3%) が嗅覚障害と診断された。5 例は呼吸性又は、嗅粘膜性嗅覚障害と診断した。残りの 27 例は、中枢性嗅覚障害と診断した。神経変性疾患が確定している 4 例と MMSE 低値の計 8 例は、神経変性疾患や認知症存在の可能性があると考えられ、うち 6 例は嗅覚障害を認めた。

REM 睡眠行動障害患者では 65.3%と高率に嗅覚障害を認め、うち 84.4%は中枢性嗅覚障害であった。RBD 症例において嗅覚障害は神経変性疾患発症の予測因子となりえると考えられ、嗅覚の検討は有用であると言える。